

# 入学時意識調査にみられる基礎的・汎用的能力の特徴について

—— 2017 年度～2022 年度入学者の入試区分による比較 ——

吉村 幸（長崎大学）

入学時意識調査の基礎的・汎用的能力に関する問いへの回答に見られる入学者の基礎的・汎用的能力の特徴を確認した。新入生全般に、情報活用をあまり得意としない、他者との協働やものごとをやり遂げることを得意とする傾向があることがわかった。また一般選抜前期の入学者と大学入学共通テストを課す特別選抜（以降、課す特別選抜）の入学者の項目への回答を比較したところ、すべての項目で課す特別選抜の方が一般選抜前期の入学者より「得意」を選択する割合が高く、特に「自己理解・自己管理能力」と「人間関係形成・社会形成能力」の面で自信を持つという特徴が示された。共通テストを課すことで入学者の多様性が損なわれる可能性という観点からも分析したが必ずしもそうではないことが示唆された。

キーワード：入学時意識調査、アドミッション・ポリシー、基本的・汎用的能力、入試区分

## 1 はじめに

長崎大学では、2008 年度から現在に至るまで「大学広報活動に関するアンケート（2008-2013）」（吉村・木村，2010，吉村，2013），「大学生活に関する入学時調査（2014-2016）」，「入学時意識調査（2017-）」と目的やテーマを変えながら入学者を対象とした調査を続けている。

2017 年度以降の入学時意識調査では、次の 9 つの大間について尋ねている。

- 進学動機
- 長崎大学についての情報収集手段
- 長崎大学が第一志望だったか
- 希望する学部に入学できたか
- 長崎大学受験決定時期
- 長崎大学受験理由
- オープンキャンパスへの参加
- 学外説明会への参加
- 基礎的・汎用的能力

2022 年現在も若干の加筆修正はあるが 2017 年度当初版とほぼ同一の調査票を用いて調査を継続している。なお、2020 年度以降の調査ではコロナ禍の影響や入試の変更について尋ねるなど状況に応じた問いも適宜加えている。

入学時意識調査の各年度の回収率は 2017 年度から順に、98.7%，98.3%，99.6%，99.6%，99.7%，99.9%とほぼ全数回収できている。入学手続き時に提出する書類の 1 つとしているからである。

本稿では、まず入学時意識調査の基礎的・汎用的能力に関する問いへの回答の全般的な特徴を確認し、次

に入試区分によってどのように違うのかを調べる。なお、社会人、帰国生徒、外国人留学生選抜は本稿での分析の対象としない。

## 2 アドミッション・ポリシーと基礎的・汎用的能力

### 2.1 アドミッション・ポリシー

長崎大学の全学アドミッション・ポリシーは次の通りである。

- 専門的な知識や技術の習得に必要な知識・技能・理解の基礎が充実している。
- ものごとの本質を学修するために必要となる基礎的な論理的・批判的思考力、判断力がある。
- 日本語・英語・その他の外国語で積極的にコミュニケーションを行おうとする姿勢とその基盤となる基礎的な言語運用力を持っている。
- 自ら考えようとする態度がある。
- 自らを高めるために継続的に学ぼうとする態度・意欲がある。
- 多様性を認め、他者と協働しようとする態度がある。
- 国際社会、地域社会への関心を持っている。

これをふまえて作成した、基礎的・汎用的能力に関する 23 の項目は次の通りである。

### 2.2 基礎的・汎用的能力についての質問項目

それぞれの項目への回答選択枝は「得意、どちらか

といえば得意, どちらかといえば苦手, 苦手, 経験がない」である。「できるかどうか」を尋ねるとほぼ全ての項目で「できる」と回答する傾向があることが他の学内アンケートから分かっているので「得意かどうか」で尋ねた。

1. コンピュータなどの情報機器を活用する。
2. グラフや表, データから情報を読み取る。
3. 問題の解決に必要な情報を集めて整理する。
4. 計画を立てる。
5. やるべきことが複数ある際, 効率的に時間を配分する。
6. 自分の意見の根拠を考える。
7. 物事の原理・原則について考える。
8. 人とのやり取りの際に, 相手の意見や主張の根拠が何なのかを考える。
9. ネット, テレビ, 新聞などのメディアの情報の信ぴょう性について考える。
10. 自らの考えを表現する。
11. ある事柄について他者と意見を交換する。
12. 自ら進んで物事に取り組む。
13. 必要に応じて自発的に学習する。
14. 多少の困難があってもやるべきことをやり遂げる。
15. 自分の長所・短所を考える。
16. 困難なことに挑戦する。
17. 読書をする(マンガ・雑誌を除く)。
18. 学校での勉強以外に興味のあることを自分で勉強する。
19. 他の人と協力して物事を行う。
20. 自分と異なる考えや文化・習慣を受け入れる。
21. グループのリーダーとして物事に取り組む。
22. 日本以外の国のことについて考える。
23. 自分の住んでいる地域のことについて考える。

これらは基礎的・汎用的能力の観点から,

- 人間関係形成・社会形成能力  
: 8, 10, 11, 19, 20, 21, 22, 23
- 自己理解・自己管理能力  
: 9, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18
- 課題対応能力  
: 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7

のように整理できる。

### 3 分析

#### 3.1 長崎大学の入学者選抜

長崎大学の入学者選抜には, 一般選抜前期, 一般選抜後期, 総合型選抜 I (旧 AO I, 以降, 総合 I), 総合型選抜 II (旧 AO II, 以降, 総合 II), 学校推薦型選抜 I (旧推薦 I, 以降, 推薦 I), 学校推薦型選抜 II (旧推薦 II, 以降, 推薦 II) がある。総合型選抜と学校推薦型選抜の I と II の違いは, I では大学入学共通テスト(以降, 大学入試センター試験とともに共通テストとする)を課さないが, II では課すところにある(表 1)。

表 1 長崎大学の入学者選抜

	出願 時期	共通 テスト	個別 試験 <sup>②</sup>	書類 1次選 考
総合 I	9月	課さない	なし	あり
総合 II	9月 11月	課す	なし	あり
推薦 I	11月	課さない	なし	なし
推薦 II	11月 12月	課す	なし	なし
前期	2月	課す	あり	なし
後期	2月	課す	なし	なし

①総合 I・II は出願時期が早く数種類の書類による 1 次選考がある, ②推薦 I・II は志望理由書等の書類と学校長の推薦が必要である, ③前期と後期は共通テスト受験後に出願する, ④課さない入試区分では原則実業系高校を対象とすることが各入試区分の特徴である。

表 2 各年度の入試区分別募集人員

	2017	2018	2019	2020	2021	2022
前期	1,006	1,006	1,006	1,030	1,038	1,039
後期	241	241	237	239	234	204
総合 I	107	107	107	82	58	62
総合 II	35	35	31	27	14	21
推薦 I	120	120	120	103	25	25
推薦 II	58	55	68	78	190	208
計	1,567	1,564	1,569	1,559	1,559	1,559

表 2 は入試区分ごとの募集人員である。2021 年度入試は以前にも増して多面的・総合的評価, 加えて特別入試における学力担保が重視されたものであった。

具体的には、多面的・総合的評価を行うべく全入試区分で面接（もしくはペーパー・インタビュー）を実施するとともに調査書に配点を行い、特別選抜の入学者の学力を担保すべく高校普通科の受験生には原則共通テストを課すことを入学選抜の基本方針とした。推薦Ⅰが減り、推薦Ⅱの募集人員が78名から190名へと大幅に増えているのはそのためである。

なお、高校へのヒアリング結果によると、面接（もしくはペーパー・インタビュー）の導入や調査書への配点を行なったことの志願行動への影響は小さいものだったようである。それぞれの入試区分で行われることは概ね変わっておらず、また面接や調査書への配点も小さいからだということである（国立六大学コンソーシアム教育連携機構入試専門部会，2022）。

### 3.2 年度による違い

#### 3.2.1 全体的傾向

まず、学部・学科，入試区分を区別せずに、項目ごとに年度（6カテゴリ）×選択枝（6カテゴリ[無回答を含む]）で回答の分布を観察した。これら二変量による回答の分布の違いが最も大きかった項目は「7. 問題の解決に必要な情報を集めて整理する」であった。

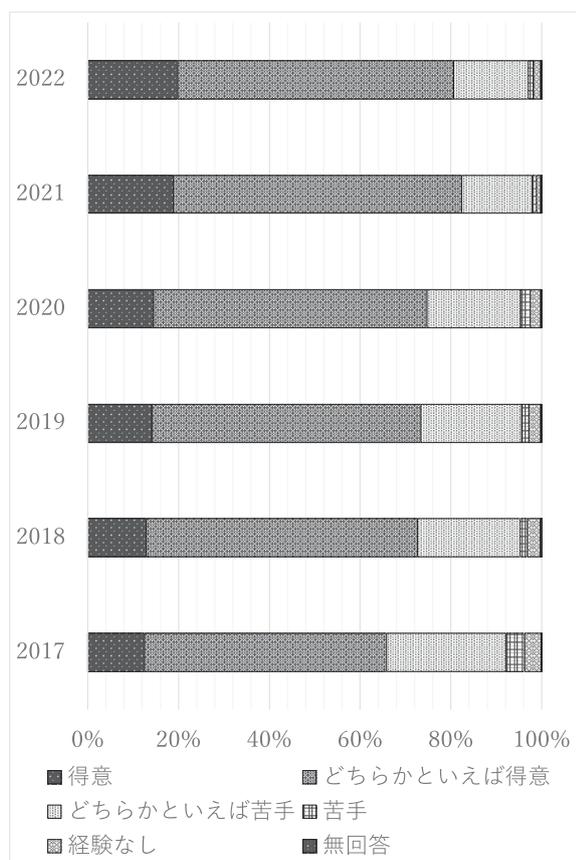


図1 3. 問題の解決に必要な情報を集めて整理する

図1より「得意」と回答した入学者が少しずつではあるが増えていることがわかる。また、年度による同様の変化が2番目に多く見られた項目は「8. 人とのやりとりの際に、相手の意見や主張の根拠が何なのかを考える」だった。

千葉大学，新潟大学，金沢大学，岡山大学，長崎大学，熊本大学で構成される国立六大学コンソーシアムの教育連携機構入試専門部会が2016年から6年計画で実施した，入学選抜における総合的・多面的な評価手法の開発に関するプロジェクト事業で行われた高校ヒアリングから，高校では新学習指導要領に対応すべくいわゆるアクティブラーニングに力を入れるようになってきていることがわかっている（国立六大学コンソーシアム教育連携機構入試専門部会，2022）。これらの項目で「得意」と回答する割合が増えたのは，例えば個別あるいはグループによる研究活動，地域社会や大学との連携活動などの高校での学習活動の成果の表れである可能性がある。

これに対し，「5. やるべきことが複数ある際，効率的に時間を配分する」や「14. 多少の困難があってもやるべきことをやりとげる」では年度による違いが見られなかった。なお，「3. 問題の解決に必要な情報を集めて整理する」ことを得意とするものが増えていることを取り上げたがその割合は多いとはいえない。入学後にフォローすることも大事であるが，高校までの教育の課題でもある。

#### 3.2.2 得意とする入学者が多い項目

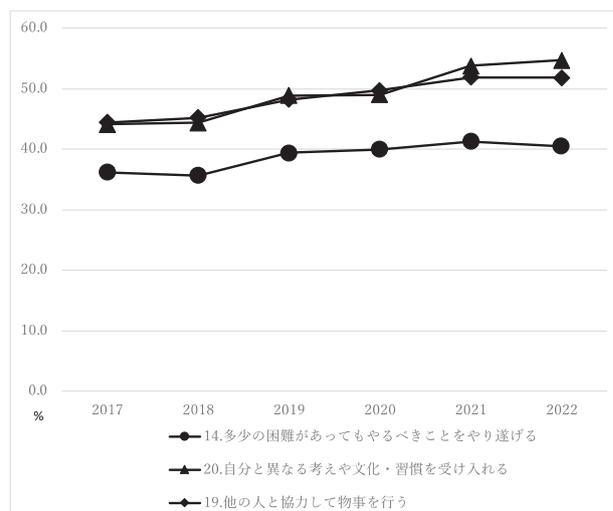


図2 「得意」選択率の年度推移（上位項目）

図2は「得意」と回答した者が多かった上位3項目の選択率の年度推移を示したものである。わずかに

が全体的に増加傾向にあることがわかる。基礎的・汎用的能力の文脈で言うと、人間関係形成・社会形成能力に自信を持つ学生が多い。一方で「21. グループのリーダーとして物事に取り組む」ことを得意とする者は多くないことから（年度順に、13.0%、12.5%、16.6%、16.6%、20.3%、21.3%）、得意とする人間関係形成もどちらかという受動的なものであることが想像できる。「14. 多少の困難があってもやるべきことをやり遂げる」ことが上位にあるのは、おそらく受験勉強や部活、あるいはそれらの両立の経験を通して得られたものだろうと特別選抜で提出される書類の内容から推察できる。

### 3.2.3 得意とする入学者が少ない項目

図3に「得意」と回答した者が最も少なかった3項目の選択率の年度推移を示した。基礎的・汎用的能力の文脈で言うと、情報活用能力・スキルに自信をもつものが少ない。入学後のカリキュラムを作成する際の参考となる。

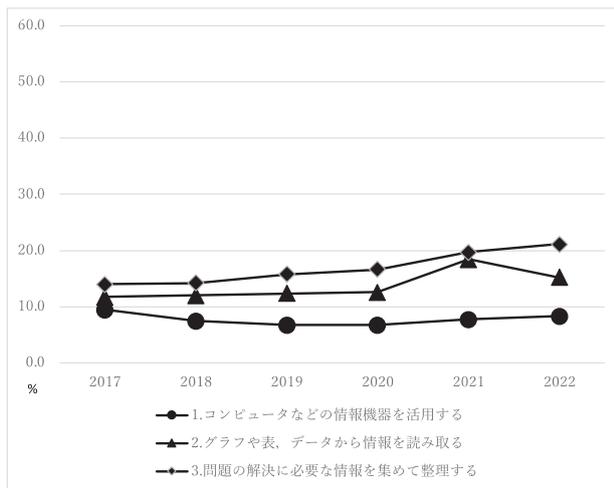


図3 「得意」選択率の年度推移（下位項目）

### 3.3 入試区分による違い

すべての入試区分で回答の比較を行うことが理想的であるが、表2に示した通り募集人員が入試区分で大きく異なる。また、少ない入試区分ではクロス集計をすると度数が少ないセルが頻発し適切な分析とはならない。

こうしたことをふまえ、共通テストを課すこと、高校普通科出身であることを共通の条件とした場合の入試区分による基礎的・汎用的能力の違いを把握することを目的として、「得意」選択率を一般選抜前期の入学者と大学入学共通テストを課す特別選抜の入学者の間で比較した。取り上げるのは「得意」選択率の上位

3項目、下位3項目である<sup>3)</sup>。

#### 3.3.1 試験区分間の比較（上位3項目）

図4に上位3項目について選抜区分別に「得意」選択率の年度推移を示した。課す特別選抜の方が一般選抜に比べ選択率が一貫して20ポイント程度高いことがわかる（2018年度は除く）。特に「14. 多少の困難があってもやるべきことをやり遂げる」と「19. 他の人と協力して物事を行う」でその傾向が目立つ。

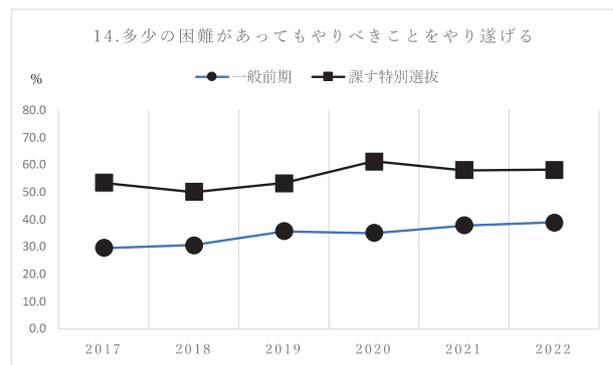
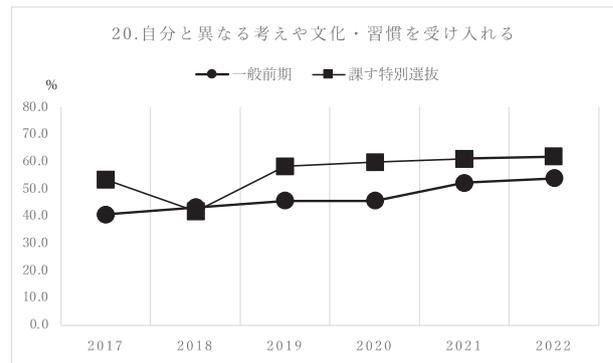
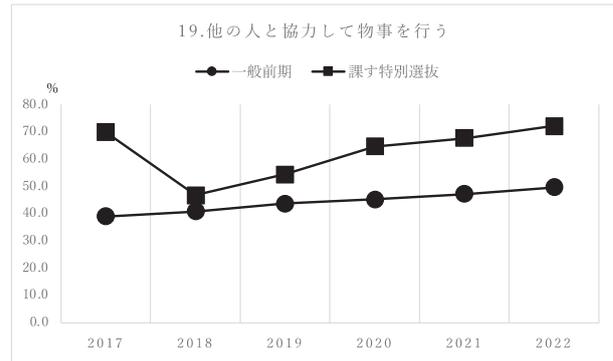


図4 得意の回答率上位3項目

#### 3.3.2 試験区分間の比較（下位3項目）

図5は下位3項目について選抜区分別に「得意」選択率の年度推移を示したものである。入試区分に関係なく「1. コンピュータなどの情報機器を活用する」や「2. グラフや表、データから情報を読み取る」を得意

とするものが少ない。「3.問題解決に必要な情報を集めて整理する」では入試区分による違いが一定程度見られる。

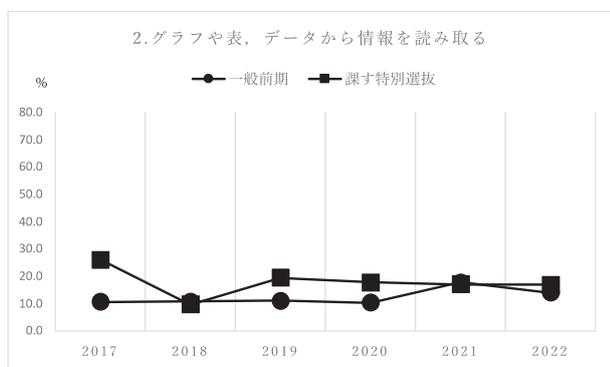
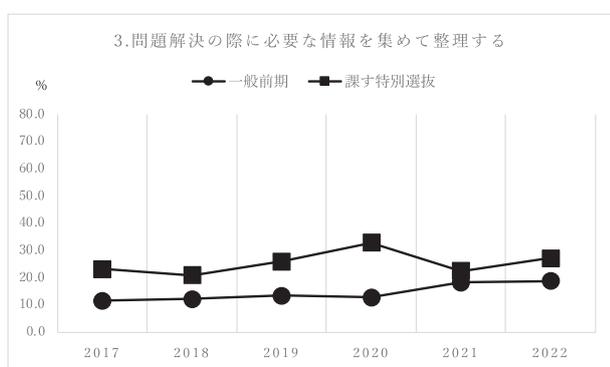
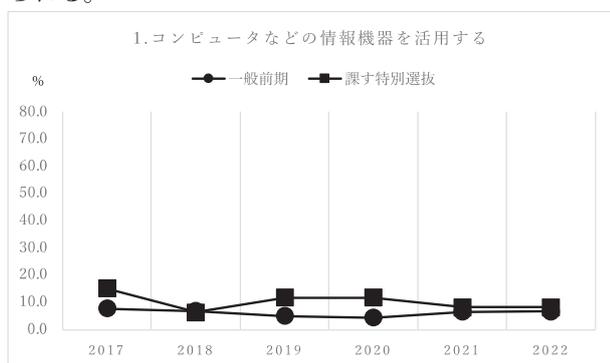


図 5 得意の回答率下位3項目

### 3.3.3 2018年度調査結果の他年度との違いについて

図4, 図5にみられるように6項目中4項目で2018年度の課す特別選抜の「得意」の選択率が前年度と比べ顕著に低下している。その原因を探るべく、2018年度入試と前年度入試の違いを調べたところ、次の事実が確認できた。

#### 1. 募集人員と枠の変更

- 医学科の推薦Ⅱで「一般研究医」「熱帯医学研究医」「国際保健医療」が「グローバルヘルス研究医」となり募集人員が15名から5名減の10名となっている。

#### 2. 入試科目・配点の変更

- 医学科の推薦Ⅱ「グローバルヘルス研究医」の学力検査等（面接、志望理由書等で計200点）に英語面接が追加され100点配点されている。またセンター試験英語の配点が50点増えている。
- 環境科学部の推薦Ⅱでセンター試験300点（5教科7科目、英語必須、他2教科・科目選択）、学力検査等300点（面接、志望理由書、調査書）の計600点から志望理由書（100点）が課されなくなり、学力検査等200点（5教科7科目、2教科・科目選択）となっている。

#### 3. 合否判定基準の文言の変更

- 医学科の推薦Ⅱおよび薬科学科の総合Ⅱで「面接の評価が著しく低い場合は選考の対象としない」を医学科で「面接の評価が著しく低い場合は不合格とする」、薬科学科で「不合格となる場合がある」へと変更している。
- 医学科で「センター試験の外国語科目の得点率が原則として85%に満たない場合は不合格とする」を追加している。

推薦Ⅱは英語面接の導入やセンター試験英語配点の増加と高い得点率の設定、志望理由書の廃止など従来に比べ、学力検査を重視したものとなっている。その結果として、入試の変更の初年度ということもあり2017年度まで推薦Ⅱで受験していた層の生徒が敬遠し、一般選抜前期を受験している層との違いが明確に表れなかったということが考えられる。そして翌年からは学力検査が重視されることを前提としてもなお推薦入試を好ましいとする受験者層が出てきたのだと解釈できる。こうした受験者層は大学側が希望している受験者層でもある。これは可能な解釈の一つであるが、募集人員と枠の変更がどのように影響を与えたかは定かではない。

## 4 まとめ

本稿では、入学者意識調査の基礎的・汎用的能力に関する問いへの回答の全体的な特徴、6年間の年度推移、そしてそれらの入試区分による比較を行った。

まず全体的な特徴として、新入生の多くは協働することや異文化・他者を受容すること、やるべきことをやり遂げることを得意とし、さらにその割合がやや右肩上がりであることがわかった。一方で情報活用およびスキルを得意とする者は少なく、この傾向

が6年間概ね同レベルで推移していることも明らかとなった。

入試区分による比較は、募集人員の少なさと偏りをふまえて一般選抜前期と課す特別選抜との間で「得意」選択率上位3項目、下位3項目について行った。その結果、得意とする者が多い上位3項目すべて、ならびに得意とする者が少ない3項目中の1項目で、課す特別選抜の入学者の方が、一般選抜前期入学者より「得意」の選択率が高いことが明らかとなった。

他の項目についても特徴の概要を把握するために、課す特別選抜の「得意」の選択率から一般選抜前期のそれを引いたものの6年間の平均値を求め比較したところ、全ての項目で課す特別選抜の方が大きいことがわかった。そのうち課す特別選抜の入学者の方が平均で10ポイント以上高かった項目を表3に示す。

基礎的・汎用的能力の文脈でいうと、課す特別選抜の入学者は特に「自己理解・自己管理能力」と「人間関係生・社会形成能力」の面で自信を持つという特徴が見られる。グループワークのメンバーを決めるのにどの入試区分で入学したかの情報を活用できるかもしれない。

表3 前期と課す特別選抜入学者の「得意」選択率の平均と差

項目	平均値		平均値の差
	課す特別	前期	
多少の困難があってもやるべきことをやり遂げる。	55.7	34.6	21.1
自ら進んで物事に取り組む。	47.8	27.2	20.6
自分の住んでいる地域のことにについて考える。	37.8	18.5	19.3
他の人と協力して物事を行う。	62.7	44.3	18.4
ある事柄について他者と意見を交換する。	48.9	30.6	18.3
グループのリーダーとして物事に取り組む。	31.9	15.1	16.7
人とのやり取りの際に、相手の意見や主張の根拠が何なのかを考える。	44.0	28.5	15.5
必要に応じて自発的に学習する。	44.9	31.4	13.4
読書をする。	42.7	29.8	12.9
困難なことに挑戦する。	34.6	21.8	12.8
自分の意見の根拠を考える。	36.5	24.7	11.8
問題の解決に必要な情報を集めて整理する。	25.5	14.6	10.9
自らの考えを表現する。	31.0	20.4	10.6

入試区分による学力の違い、特に特別選抜の入学者の学力の低さについてはしばしば言及されてきた。文部科学省の大学入学者選抜実施要項においても2021年度入試から推薦入試の「学力検査を免除し」の文言が消え、総合型、学校推薦型選抜ともに共通テストの

活用が求められるようになった。

入学者の多様化を目的に入学者選抜の多様化が目指されるのだが、共通テストの活用を促進するなど特別選抜が学力を重視したのになると一般選抜との差異がそれ以前のものより小さくなり、入学者の多様性が損なわれることも危惧される。このことを確認するために23項目への「得意」選択率の差（課す特別選抜から一般選抜前期を引く）の平均値を求め年度推移を確認した（表4）。

表4に示した通り2017年度には23項目平均で17.2ポイントの差があったが2018年度には9.3ポイントと大幅に減少している。その後差は少しずつ大きくなっていくが2021年度の入試改革で15.7ポイントから8.1ポイントへと再度大幅に差が小さくなっている。

2018年度にいくつかの学部・学科で学力検査重視の方向へ入試の変更が行われたが、2021年度の変更はそれに比べるとはるかに大きい。このことが「得意」選択率の差に影響したのかもしれない。課す特別選抜の入学者の特徴が薄れたと解釈できる<sup>4)</sup>。この状態がこのまま続くのか、それとも2019年度、2020年度のように差が広がっていくのか（特徴がはっきりしていくのか）、このことについて引き続き調査結果を注視する。

表4 23項目での「得意」選択率の平均と差の年度推移

年度	「得意」選択率全項目平均		
	課す特別	前期	差
2017	38.8	21.6	17.2
2018	31.9	22.6	9.3
2019	36.3	25.0	11.3
2020	40.1	24.4	15.7
2021	36.8	28.7	8.1
2022	39.2	29.0	10.2

注

- 1) 2021年度以前から調査書への配点、面接の導入の志願への影響について継続的に高校へヒアリングを行なっているがどの高校でも生徒は気にしていない様子であるとの回答を得ている。
- 2) 個別試験は前期の教科に係る個別学力検査をさす。他の入試区分でも学部ごとに小論文や総合問題等の学力検査を課している。
- 3) 紙幅の都合上他の項目は割愛する。
- 4) 2018年度と2021年度にそれぞれ3項目、2022年度に1項目で一般前期の「得意」選択率の方が高い。

参考文献

国立六大学コンソーシアム教育連携機構入試専門部会（2022）.

『大学入学者選抜における主体性等の評価・最終報告書』.

吉村幸・木村拓也 (2010). 「新入生を対象とした入試広報活動に関する調査」 『大学入試研究ジャーナル』 20, 209-216.

吉村幸 (2013). 「新入生の受験校決定理由の特徴と入学時点での「気持ち」および学業成績との関連」 『大学入試研究ジャーナル』 23, 63-70.